遺跡紹介

太宰府市所在愛嶽神社周辺段造成の歴史的位置付け

――山岳寺院の平面構造調査――

下高　大輔

はじめに

福岡県太宰府市の北東には標高800mを超える宝満山（竈門山）が聳える。その南西方向に標高440mの愛岳（おたけ）山がある（第1図）。江戸時代中期初頭に成立した地誌『筑前國続風土記』（以下、『風土記』とする）によると、「竈門山よりひ(ママ)きくして小なれは、大岳に對して、小岳と云なるへし。」とあり、少なくとも江戸時代には二つの山は大小のセット関係で捉えられていたようである。宝満山山頂には近世と考えられている山岳寺院に伴う段造成が複数存在していることは周知のことである(1)。一方の愛岳山山頂には愛嶽神社（太宰府市大字内山）が存在しており(2)、それに伴う段造成が展開している。また、その南側の尾根続き標高432m地点を中心に中世城郭跡として周知されている升形城跡（筑紫野市大字大石・太宰府市大字内山）に伴う段造成が展開する(3)。このように愛嶽神社と升形城跡に関する歴史的認識とそれに関する遺構である段造成が結びついており、遺跡として周知されているものと考えられる。本稿は、これらの段造成を再度確認しつつ、さらにその周辺を踏査した結果確認できた愛嶽神社の東側に展開している段造成についての平面構造の把握とその歴史的位置付けを行うことを目的とする。

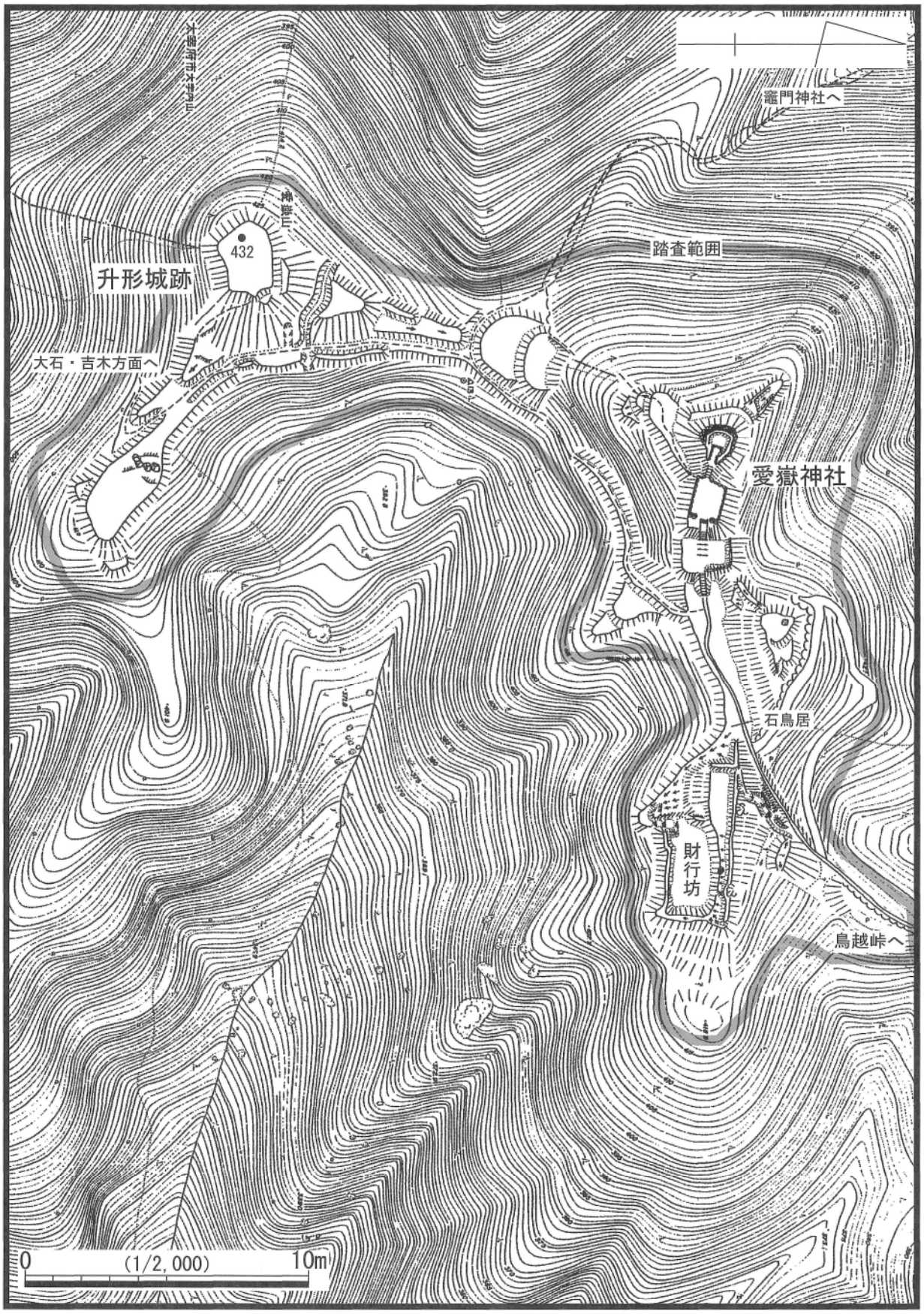
1　調査方法

調査方法は、踏査によって人為造成地形を把握した後に、一人で方位磁石（コンパス）と簡易測距計（アメリカ・レンジング社製）を用いて、千分の一の縮尺地形図(4)上に土塁や堀などを含む人為造成地形の図化作業を行った。この調査方法は城郭（縄張）研究(5)において一般的に行われていることであり、古くは大日本帝国陸軍内の組織である本邦築城史編纂委員会による調査まで遡る(6)。なお、今回の図化作業の方法については、高田徹「縄張り図の描き方　自分なりの見方を図にこめよう」『城を歩く【その調べ方・楽しみ方】』新人物往来社、2003年に詳しいので参照されたい。

第１図　愛岳山及び調査地位置図

2　地表面観察成果

上記の方法によって作成したものが第2図である。先述の通り、愛岳山山頂の愛嶽神社からそれに伴う石鳥居までは神社として周知されており、その南側に展開する土塁を含む段造成は升形城跡として周知されている(7)。今回の調査で新たに把握・図



第２図　愛嶽神社周辺の段造成（S＝1/2,000）

化した部分は、石鳥居のある段造成の北側の尾根筋と神社の南側を通って升形城跡へ至る通路の尾根先端に位置する段造成、そして、石鳥居の東側に土塁を伴って長方形状を呈して展開している段造成である。注目すべきは後者の段造成である。これは、北風を防ぐかのように南向きに立地しており、その南側にも土塁が配置されているが他の土塁に比べるとひじょうに低いものとなっている。さらに、土塁に囲まれた段造成への入り口は、石鳥居の場所から南東方向に下って南側から入らせる構造となっており、入り口部分には階段状の段差が確認できた。段造成内は猪による掘り返しが著しいが、礎石建物に伴うと考えられる平石が一定間隔で点在していることが確認できた。この部分には何らかの構造物が立っていた可能性は極めて高い。この平面構造の特徴としては、山上において生活するために北風を防いで南から日光をより多く得ることを目的とした尾根上を避けた南斜面という立地、段造成への入り口を一方向のみとして完全に一つの生活空間として独立していることである。これらの特徴は、宝満山山頂の近世坊跡の段造成と近似するものである(8)。

3　宝満山近世山岳寺院坊跡―財行坊―

それでは、今回の調査によって確認できた土塁を伴う段造成はどのような要因によって構築されたのであろうか。その手がかりが『風土記』の「小岳社」の説明文の一部に記されている。少し長くなるがそれを引用すると、「(前略) むかしより山上に伊豆奈権現のほこら有りしを、寛永年中長政公の家臣久野外記入道卜心、穴澤流の長刀をすくれてよくつかひけるか、伊豆奈の法を行ひける。此邊其所領也し故、改めて再興し、寶滿山の財行坊を以て社僧とす。故に寶滿より是を預れり。(後略)」とある。これによると、寛永年間（1624～1643年）に黒田藩初代藩主である長政の家臣久野氏によって、元々愛岳山にあった神社を再興して、その管理を宝満山の財行坊に定めたことが記されている。また、『筑前國続風土記附録』（以下、『附録』とする）の「愛嶽山」の説明文には、「山の絶頂に愛嶽神社あり。祭る所伊豆奈権現なり。上宮ハ方三尺、三方ハ石壁也。社前石階の下に下宮あり。二間二間半の社なり。其左右ハ平地にて周りハ石垣也。御供屋・鐘撞堂・鳥居一基あり。祭日ハ四月十四日、廿四日也。寶滿山財行坊奉祀せり。」とある。『風土記』の記事内容に、『附録』の記事内容と現在確認できる愛嶽神社に伴う石垣や段造成の景観が一致することを勘案すると、今回確認できた段造成が宝満山近世山岳寺院を構成していた「財行坊」自身である可能性が極めて高いと考えられる(9)。

おわりに

今回の調査によって、愛岳山山頂における段造成の把握とそれが宝満山近世山岳寺院の坊の一つであった財行坊の可能性を指摘できた。本稿によって愛岳山山頂における近世坊跡の周知の一助になれば幸いである。

なお、今回の調査地は、愛嶽神社の石鳥居の地点まで重機によって掘削された山道（私道）が開通しているという現状があり、具体的な遺跡の周知を早急に行わなければいけない現実に直面している場所であったといえる。このような場合、巨費を投じて・複数の人員を確保して・長期間に渡る調査を行わずとも可能な、今回のような調査方法を文化財保護事業の一環として行政担当者は積極的に取り入れていくべきであろう。いくら調査期間を確保して巨費を投じて人員や最新鋭の測量機材を揃えて調査を行っても、最終的に図面を作成していく過程において人為造成の有無・その構造の把握を行うのは文化財調査担当者であり、調査担当者自身がこのような判断が不得手であれば、その成果図面は文化財としての人為造成地形の把握と歴史的評価を誤った方向に進ませる可能性が

ある。そのため、文化財行政に所属する調査担当者は、常に自らの調査技能を確認・向上を行う場(例えば、全国規模の研究会など）へ出向いたり、各専門家とのネットワークを行政・研究機関・民間枠といったことに拘らず築く努力をしなければならないと考える。

本稿の掲載を快諾してくださった太宰府市市史資料室に記して感謝申し上げます。また、本稿の作成にあたり、以下の方々のご協力・ご教示を得た。記して感謝致します。

岡寺良、小西信二、森弘子、山村信榮（敬称略、五十音順）

註

（1）　本稿においては紙面の都合上、宝満山に関する調査・研究史をまとめることができない。最近、(財）古都大宰府保存協会『都府楼』39号、2007年、で「宝満山」の特集が組まれており、詳細な調査・研究史が記載されているので参照されたい。

（2）　太宰府市「第1編第2章　愛嶽神社」『太宰府市史　民俗資料編』、1993年。

（3）　岡寺良「升方城」『歴史史料としての戦国期城郭』中西義昌編、服部英雄研究室、2001年。なお、『風土記』は「升形城址」とされているため、本稿では、こちらを採用する。

（4）（財）太宰府顕彰会『宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布調査報告書』小西信二編、1984年。なお、この測量図中には愛嶽神社の石鳥居の位置が記載されていたため、今回の簡易測量の基点はこれを用いた。

（5）　現在、城郭（縄張）研究は一研究分野として定着していると考えられるが、それでも埋蔵文化財調査の一つである発掘調査を主たる仕事と思い込んでいる文化財行政担当者に至っては理解し難い研究分野と思われている部分も少なくない。城郭（縄張）研究とは、地表面観察によって確認できる城郭遺構（例えば、堀や土塁など）を簡易測量などによって図化（いわゆる縄張図の作成）し、その図から城郭の平面構造を把握して、軍事性を考察する研究のことである。さらにこれは、発掘調査が終了した城郭遺構についても、その軍事性の読み込みを行うことも含んでいる（中井均1994「織豊系城郭の特質について―石垣・瓦・礎石建物―」『織豊城郭』創刊号、織豊期城郭研究会)。なお、近年は、この調査・研究手法を用いた山岳寺院の研究も行われ始めた（(財）栗東市文化体育振興事業団『忘れられた霊場をさぐる―栗東・湖南の山寺復元の試み―』、2005年、同『忘れられた霊場をさぐる2―山寺のうつりかわり―近江南部の山寺をさぐる―』、2007年)。これらの調査・研究を行っているのは、主に福永清治氏（野洲市歴史民俗博物館）・藤岡英礼氏（(財）栗東市文化体育振興事業団）であり、両氏とも城郭研究者でもある。文化財調査において、発掘調査を外科的処置（手術など）と捉えた場合、地表面観察調査は内科的処置（診察など）であると考える。主に中世以降の遺跡は現地表面に何らかの痕跡（例えば、段造成や溝などによる地割）を残している場合が多い。そのため、これらの遺跡を調査する場合においては特に地表面観察調査を行ってから発掘調査を行うことによって、より多くの情報を発掘調査時に引き出すことができると考える。遺跡がおかれている現状を把握せずに発掘調査のみを行えば、その遺跡の本質を見出すことは難しいだろう。

（6）　これは、城郭（縄張）研究の研究史・学史に相当することであり、多数の論考によってまとめられている。例えば、中井均「本邦築城史編纂委員会と『日本城郭史資料』について―敗戦前の城郭研究史を理解するために―」『中世城郭研究』7、中世城郭研究会、1993年。八巻孝夫「明治から敗戦までの城郭研究の流れについて―旧陸軍の城郭研究及び縄張研究を中心に―」『中世城郭研究』10、中世城郭研究会、1996年。

（7）　註(2)(3)に同じ。なお今回の調査で確認した愛嶽神社東側の段造成の北側に堀切状の地形が確認できる。これが升形城に関わる人為造成であった場合は、愛嶽山山頂全域が城郭化していた可能性がある。これについては、別稿を用意する。

（8）　岡寺良「宝満山近世僧坊跡の調査と検討―山岳寺院の平面構造調査―」『九州歴史資料館研究論集』33、2008年。なお、岡寺氏の調査方法も筆者と同様のものである。

（9）　註(8)文献に同じ。岡寺氏は論考の中で調査・図化した段造成と『竈門山水帳』（寛文12年（1672）成立、文化5年（1808）までの間に随時書写・加筆）記載の各坊の名称とその範囲を示す記事内容から可能な限り位置比定を行っている。その中で、財行坊の位置について、財行坊は二箇所あり、一箇所は東院谷において比定、もう一箇所を本稿を引用して今回の調査で明らかとなった場所の可能性を指摘している。なお、財行坊は『水帳』によると18世紀頃には新坊と名称変更している。

〔付記〕本稿は、宝満山の山岳寺院遺構及び城郭遺構の平面構造を把握するために行った調査成果の一部である。今回の調査においては、九州歴史資料館の岡寺良氏と検討を行いながら進めており、岡寺氏が宝満山山頂を、下高がその周辺の一部である愛岳山山頂をそれぞれ調査した。そのため、調査期間中から本稿執筆段階に至るまでお互いに情報交換を行った。よって、本稿と同時に公表される岡寺2008年文献を本文中に引用している。

また、本稿脱稿後に、岡寺氏より「三笠郡吉木村龍城古址ノ図」『古戦古城之図』（内閣文庫、大倉喜太郎献納本、文政から天保年間にかけて成立）の存在についてご教示頂いた。この図は城名は異なるが、明らかに升形城跡を描いている。これに本稿において提示した財行坊（新坊）の可能性のある段造成付近に建物が描かれており、踏査時に確認した一定間隔で点在する平石がこの建物の基礎であった可能性が極めて高い。

（しもたか・だいすけ　太宰府市教育委員会文化財課嘱託）